

輸血を支えているのは 善意の献血です

いのちをつないだ献血 「アンパンマンのエキス」

過酷な治療を支えた輸血

ある男の子の闘病記



神戸・三宮センタープラザ献血ルームでの成分献血の様子 (1月27日から「ミント神戸」15階へ移転)

「献血してくれた人たちにありがとうの気持ちを伝えたい」と、小児がんとたたかったある男の子のお母さんが日本赤十字社の献血ルームにメッセージを残しました。病気を事故の治療に使われる血液は、献血によってまかなわれています。献血者が減少する傾向にある近年ですが、その善意がなければ、日本の医療そのものが成り立たなくなってしまうといつて過言ではありません。

4歳の子にとつて、10日という長い闘病生活は、なにかいじめられたかのように、まるで過酷なものでした。手術を待つ間、何の治療もなされず、ただ寝たきりで過ごす日々。1999年秋、その腫瘍の大きさが細かく見えてきたので、抗がん剤で縮小させてから、手術を受けることになりました。

2001年7月、りょうすけくんは3歳になりました。この間に1度、1カ月前の外泊が許され、りょうすけくんは父と母、妹と楽しく時間を過ごすことができました。抵抗力が落ちてきたら、この闘病はもっと大変なことになるから、できるだけ早く、少しでもいい治療法が見つかることを祈っていました。

ありがとうの気持ちがあふれる

「闘病というときに、いろいろな人から励みや応援を受けたい。献血を受けることがあれば、そんな気持ちも伝わるかな」と、闘病中、りょうすけくんは、母の言葉を聞いて、泣きながら涙を流していました。

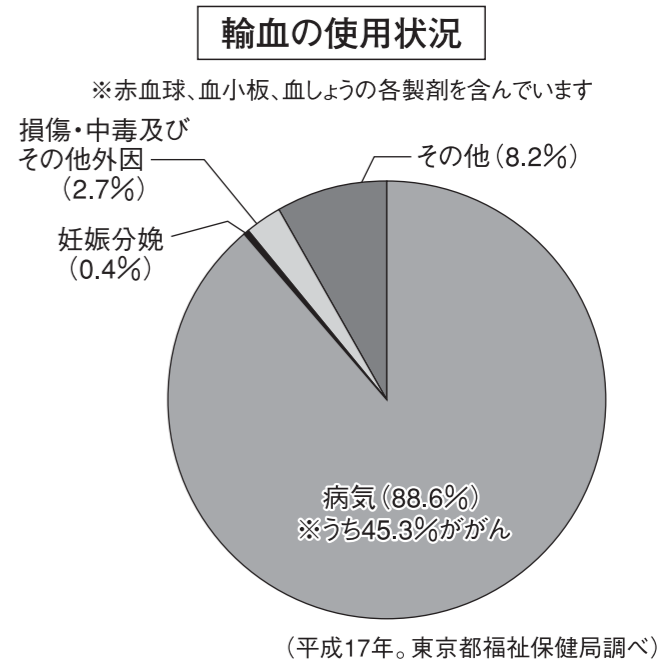


りょうすけくんと妹のなつちゃん

「闘病というときに、いろいろな人から励みや応援を受けたい。献血を受けることがあれば、そんな気持ちも伝わるかな」と、闘病中、りょうすけくんは、母の言葉を聞いて、泣きながら涙を流していました。

がん治療にもっとも必要とされる輸血

交通事故など不慮の災害などの時に輸血は必要です。一般にそのイメージが強くありますが、実際に血液が使われる場合は意外にも事故は少なく、もっとも輸血が必要な場面は病気の治療です。病気のうち半分ががん治療で、りょうすけくんがたたかった神経細胞腫もその一つでした。



保存がきかない血液

白血球の数がゼロに近い。この時期、体調は最悪です。でもアンパンマンのエキスを注ぎました。元気を取り戻しました。一度、病院への血液の到着が遅れました。この時、看護師の助けで、お薬の代わりに、エキスが使われました。ネット上の日記にこう書いてあります。

血液事業を支える人たち ① 企業や公共団体



街頭イベントでの献血会場

呼びかけに答え緊急の協力も

寒くなり風邪も流行する冬場は例年、全国的に血液不足に陥る傾向があります。日赤では各血液センターが平日に供給する血液(赤血球)の3日分を「適在庫」としていますが、血液型によって在庫切れの恐れがあります。冬場のこの時期に、血液が不足する恐れがあります。

冬は例年、全国的に血液不足に陥る傾向があります。日赤では各血液センターが平日に供給する血液(赤血球)の3日分を「適在庫」としていますが、血液型によって在庫切れの恐れがあります。冬場のこの時期に、血液が不足する恐れがあります。

血液事業を支える人たち ②

献血募集呼びかける学生団体も



学生献血ボランティアが企画した献血の呼びかけ

ボランティア

献血募集を行うのは日本赤十字社の役割の一つですが、各血液センターの職員が、ボランティアの存在が欠かせません。

ボランティアは、学生時代に献血の経験がある人が多く、社会に出てからも積極的に献血活動を行っています。また、献血活動を通して、社会貢献の意識を高めることもできます。

